

にしむらゆきお

西村幸夫

文学系研究員
文学部教授、都市社会学

① 一地名の研究 柳田國男（『柳田國男全集

8』所収、筑摩書房、一九九八年）

柳田民俗学の一端に触れることによつて、日本とは何か、日本の文化とは何か、日本人はどのような暮らしをしてきたかについて、膨大な情報をもとに掘り下げて思惟するということがどういうことかを知ること

ができる。その代表としての一編なので、この本に限定した推薦ではない。ひろく柳田國男のひらいてくれた世界を垣間見て欲しい。

『日本のすまい』(全3巻) 西山卯三(勁草書房、一九七五 八〇)

今では入手しづらくなっているよさだが、私が駒場へ入学した当時生協の書籍部で見かけ、定価七五〇〇円から一二〇〇〇円と高価だったにもかかわらず即座に購入した本。文章はもちろん、図表からスケッチ、箱のデザインまで自ら手がけた、厚積込められた二巻。日本のすまいの全貌をひとつの思想をもって描ききろうとした力作である。

『司思九十年』 白川静(平凡社、二〇〇二)

金石文・文字学の泰斗の学問人生を振り返った書。白川静が著したほかのどの本を読んでもその実証研究の奥深さに心を打たれるが、本書では学問一筋に生きるということとはこういうことをいうのだということ、身を以てなしてくれている。こうした三人と同時代に生きているだけでありがたいという気持ちになる。

② 『集落の教え100』 原広司(彰国社、一九九八)

東大教授でもあった建築家が二五年にわたる海外集落調査の成果を一〇〇のエッセンスとして簡潔にまとめた書。数多い写真とアフオリズムとも短詩とも呼べる詩情あふれる美しい短文として綴ったもの。土着的な集落が周到にデザインされたものであること、その様相から学ぶべき点が数多いことの発見は、私たちの集落を見る目を鍛えてくれる。

『東京都市計画物語』 越沢明(ちくま学芸文庫、二〇〇二)

日本には(したがって東京にも)都市計画は不在だったとよく言われるが、この書を読むと、たしかに東京にも都市計画はあったということがよくわかる。ただし、それは挫折したのである。もつとも、よく見ると空間の至る所にその痕跡を見出すことができる。東京育ちのひとつも、東京暮らしを始めたばかりのひとつも、本書を読むことによって、東京の見方が格段に深まるだろう。

『日本近現代都市計画の展開』 一松と三〇〇 石

田頼房(自治体研究社、二〇〇四)

初めて本格的にまとめられた日本の都市計画の通史。出版されて間もないが、今後、都市計画を学ぶ者の必読の教科書となるだろう。私自身後述するようにまがりなりにも通史をまとめたことがあるので、その苦労が並大抵でないことはよくわかる。つい最近まで受験生であった新入生諸君にとっては、教科書とはたんに暗記の対象だったかもしれないが、類書のない中で通史を編むということは、史実を博捜し、それを確固とした視点でふるいにかけ、位置づけを与えていくという、気の遠くなる営みの産物なのだ。

③ 『繁華街の近代』 都市・東京の消費空間 初田亨(二〇〇四)

永年、都市空間としての繁華街研究をおこなってきた著者が銀座煉瓦街や土蔵づくりの商店街からアールデコの古舗建築まで、百貨店や喫茶店の出現を東京を舞台に、豊富な写真や図面を用いて描いている。こうしたことを知って盛り場のまち歩きをするとなると、まちのおもしろさも倍増するだろう。

④ 『都市保全計画』 歴史・文化・自然を活かしたまちづくり 東京大学出版会、二〇〇四

二〇〇〇頁を超える本なので気が引けるが、都市保全計画の歴史から技法、実践例、海外事例まで全般にわたって書かれたわが国初の本であり、筆者自身にとっても二〇年間の研鑽の成果でもある。巻末に詳細な年表や法令等の資料を附している。